

## 『名人伝』を読んで考えたこと

弘前市立新和中学校

高橋 香 圭

才能とは、どのようにして生まれるものなのでしょうか。  
『名人伝』を読んで私は才能と努力の違いについて考えることができました。

『名人伝』は天下第一の弓の名人を志す紀昌が師匠の元で厳しい修業を重ね、ようやく名人という称号を手にしたものの強くなりすぎたための疎外感、通り過ぎていく日常、紀昌が最終的に描いた「弓を射る」とはどんなことなのかを考えるお話です。私はこの話を読んで、一度決めたことを貫き通す紀昌は、すごいと思いました。名人になるまで修業を続け、何年もの間諦めない姿勢は、とても出来ることではないので、紀昌は、ねばり強く、不屈の魂を持っている努力家だと私は考えました。

「至<sup>いた</sup>為<sup>な</sup>は為<sup>な</sup>す無<sup>な</sup>く、至<sup>いた</sup>言<sup>げ</sup>は言<sup>げ</sup>を去<sup>さ</sup>り、至<sup>いた</sup>射<sup>や</sup>は射<sup>や</sup>ることなし」という言葉は、私が一番印象に残っている言葉です。この意味は「射るという行為を追求していくと射る行為を越える段階に達する。言葉を追求すると言葉を越える段階に達し、弓

を極めれば弓を射ないという段階に達する。」です。この言葉から、紀昌は、たくさん努力を重ねてきたからこそ言えたことだと思いました。

私は、一つのことに一筋で取り組むことができず、肝じんな所で失敗をしてしまうと、心が折れて諦めてしまいます。でも、紀昌の懸命に努力をする姿を読み心を打たれました。私は一つのことに集中する時、どうしてもあきってしまう癖があるので、紀昌のように一つのことに集中して打ち込めるようになりたいと、心から思いました。

人は元々自分がそなえた才能をそれとは気付きません。その人にとってはあたり前のことだからです。例えるとすれば、鳥が空を飛べることを人々はうらやましいと思っているけれど鳥はそれを才能だと思いません。このように、人は自分にある才能をあたり前だと思いき、他人から見るとその人は才能があるように見えます。それは、紀昌も同じです。紀昌は、自分にとってあたり前のように、一つのことに対して熱

を注いで努力を怠りませんでした。私の目からすると、十分すごいことで、うらやましいです。紀昌は努力する才能があると思いました。

私は、『名人伝』を読んで、考えたことが一つあります。

それは、人は誰しも才能を持っている、ということです。人には必ず一つは才能があると私は思います。人は人生で必ず妬み嫉みを経験します。人は自分がないものを他人に見つけ

ると、嫉妬を生みます。でも人と人を比べることで、それぞれの才能を見つけることもできます。才能は、無意識のうちに動作や口に出ていることがあります。才能とは、人によってたくさんあります。明るく笑わせられること、人の良い所をみつげられること、人に優しくできることなど、私たちにとってあたり前のことも才能です。私の才能とは何か……。じっくりと探していこうと思います。